社会的ストレスパタンの分析

——過疎地域と都市の比較検討¹——

愛知教育大学 松 田 惺・鈴木 眞 雄

愛知県立看護短期大学 永 田 忠 夫

愛知県コロニー発達障害研究所 植 村 勝 彦

An analysis of the social stress pattern : A comparison between
“Kaso (thinly-populated)” and urban communities

Sei Matsuda, Masao Suzuki (*Department of Psychology, Faculty of Education, Aichi University of Education, Kariya 448*), Tadao Nagata (*Aichi Prefectural Junior College of Nursing, Moriyama-ku, Nagoya 463*), and Katsuhiko Uemura (*Institute for Developmental Research, Aichi Prefectural Colony, Kasugai 487*)

Based on the responses of the householders to the “Social Stress Scale”, we intended to analyse and compare stress-patterns between “Kaso(thinly-populated)” and urban communities. We obtained 28 core-profiles, by factor-analysing the scale, calculating “factor-item-scores” for each subject, and adopting cluster analysis. Further, we found 9 types finally by reducing the number of these core-profiles by the Hayashi’s III. Five(low-stress, high-stress-for-institutional-systems, high-stress, high-stress-in-vocation-and-business, and high-stress-for-dwelling-circumstances), out of the nine, were extracted from the “Kaso”, and three (low-stress, high-stress-for-institutional-system, and high-stress-in-vocation-and-business) from the urban, and the rest(high-stress-for-educational-and-cultural-facilities) was related to both “Kaso” and urban. The description of each type by the representative cases revealed the progress of urbanization and complexities in the “Kaso” community. Methodological problems were also discussed.

Key words : community, stress-pattern, factor analysis, cluster analysis, core profile, urbanization.

社会的ストレス (social stress) は、Selye (1976) に基づけば、社会生活の中で遭遇する出来事のうちに、全身適応症候群を生じさせてくるようなストレス刺激を意味すると考えてよい。しかし、ストレスの概念そのものがあいまいで多義的に用いられてきたこともあって、社会的ストレスの概念についても、これまでに明確な概念規定はなされてこなかった (Levine & Scotch, 1970)。Dohrenwend & Dohrenwend (1974) は、日常の生活の流れの中で生じてくる、誰でもが経験するような社会的変件事象に注目し、“stressful life events”と表現すると共に、その事象のストレス刺激としての強度を数量化したうえで、ストレスの総量を算出している。山本 (1973) や小林・石原・坂本 (1977) は、変件事象のチェックとあわせて、その事象の個人にとっての重大さの程度を重みづけとして加えることによって、やはりストレスを総

量として求めている。

これらの諸研究において問題となることは、1つは、変件事象のすべてを“stressful”として尺度に組みこんでいることであり、いま1つは、ストレスを総量としてのみとらえていることである。それぞれの個人や家族が直面している困難な状況を理解したり、時として後の介入 (intervention) を考える場合、単に変件事象の累積としての強度が示されていることよりも、どのような事態がストレスとして存在しているのか、また、いくつかのストレスが相互に関連しあってどのような危機的状况を生みだしているか、についての見通しが得られることの方が重要である。

このような観点から、われわれは個人や家族に不快な心理的緊張を生みだすような、望ましくない、あるいは否定的な日常生活の事態を社会的ストレスとして規定した。そして、生活領域、生活構造および生活福祉の3つの理論的枠組みを軸として、生活状況を構造的にとらえ

¹ 本研究の概要は、日本心理学会第44回大会 (北海道大学, 1980) において報告された。

ると共に、その構造に対応する社会的ストレスの記述を可能なかぎり取り出し、その記述の一般性について確めることのできたものを“社会的ストレス尺度”として構成した(植村・永田・松田・鈴木, 1979a)。なお、この尺度に含まれる3つの下位領域のうち、すでに社会生活と家族生活に関する尺度については、因子論的な観点からの把握を試み、それらの因子に寄与する背景的要因を明らかにしてきた(植村他, 1979b, 1979c)。

本論の目的の1つは、このような分析の経過をふまえて、“社会的ストレス尺度”を職業生活に関する領域もあわせた全体としてとりあげ、このような多面的な、しかも構造化された尺度を通して、個人ごとのストレスパタンをいくつかの類型としてとらえると共に、代表的事例研究(Shontz, 1965)によって、個人の置かれている危機的状況を構造的に把握できるかどうか、方法論的な検討を行なうことである。

一方、われわれはこれまでに、過疎地域の家族関係の問題を、心理学的な、いわゆる生き方の問題として設定し、過疎という現象の背後で、過疎地域に現実に生活する人々がどのような心理的危機状況にあるかを、種々の角度から分析してきた(松田他, 1973; 鈴木他, 1972; 植村, 1974)。また、単に過疎地域の居住者のみでなく、過疎地から都市へ移動した者との比較検討をも行なった(植村・松田, 1974)。

これらの過疎地域に関する研究においては、用いられた面接調査や質問紙調査等が十分に組織的構成的ではなかったために、全体的構造的把握にまでは至らなかった。社会的ストレス尺度を構成してきた意図の1つは、このような過疎地域の心理的危機状況を、構造化された事態との関連において、ストレスパタンを通して構造的にとらえなおすことにあった。また、比較すべき都市居住者の特性についても、都市化による過疎地域の変貌という今日の状況を考慮に入れると、過疎出身者に限定することなく、全体的な都市の状況の把握という観点が重要になる。

その際、各々の個人が置かれている状況を、ストレスパタンの類型的把握を通して構造的に理解すると共に、それぞれの地域における類型間の相互関係を見通すことによって、過疎や都市の危機的状況の意味がより構造的に明らかとなり、ひいては、そのような状況に対する介入の手掛かりがより多く得られてくると考えられる。

本論の第2の目的は、上述のような観点から、都市との比較を通して、過疎地域における社会的ストレスパタンの基本的な特徴、その心理的危機状況の構造を、より組織的な視点から明らかにしていくことである。

分 析 I

目 的

社会的ストレスパタンの分析を進めていくための手掛りとなる因子、およびその因子を代表する尺度群を決定することを目的とする。

方 法

“社会的ストレス尺度”の構成 この尺度は、大きく3領域(3部)にまとめられており、第1部地域生活は13尺度59項目、第2部職業生活は15尺度68項目、第3部家族生活は19尺度81項目から構成されている(植村他, 1979a)。なお、これらの調査項目にあわせて、生活意識、生活感情、および地域社会観に関する質問がなされた。

調査対象・調査方法・調査時期 過疎地域(過疎法に基づく指定地域; 愛知県足助町, 稲武町, 旭町)655名、都市地域(豊田市およびその周辺)818名の世帯主について、学童・生徒等を通しての留置き調査によって回答を得た。1978年12月から1979年1月に実施した。

結 果

因子分析による代表尺度群の決定 各領域別に、各尺度の下位項目の評定点の合計点を尺度値として、各尺度間の相関を求め、共通性の初期値を重相関係数の平方とする共通性反復推定の主因子解を行ない、固有値1.0以上の因子を採用し、バリマックス回転を行なった²。得られた因子名および含まれる尺度名を以下に示す。

第1部 地域生活(植村他, 1979c)——第1因子・制度的ストレス(公共事業、行政サービス、防犯・防災対策、交通、保健・衛生)、第2因子・非制度的ストレス(住環境、住み心地、しきたり、近所づきあい、地域社会での役割)。

第2部 職業生活——第1因子・職業生活への適応(収入の評価、労働・勤務形態-時間、労働・勤務形態-作業の分担、作業特性、経営の見通し)。

第3部 家族生活(植村他, 1979b)——第1因子・家族成員相互の人間関係(夫婦の調和、家族の勢力関係、家族の親和関係、家のしきたり・風習)、第2因子・家族生活の経済的側面(進学問題、家計の圧迫感、老後・不時の蓄え)、第3因子・家屋の居住環境(家屋の空間、家屋の構造、家屋の衛生環境)、第4因子・子どもとの日常

² 分析にあたっては、愛知教育大学教育学工学センターFACOM M-130を介し、名古屋大学大型計算機センターFACOM 230-75/M-200を利用した。また、分析プログラムは、SPSS V6(三宅・中野・水野・山本, 1977)によった。以下のクラスター分析、Qモード因子分析、数量化Ⅲ類についても、すべて同様である。なお、被調査者によっては非該当の尺度があるため、相関係数の算出にあたっては、ペア単位の除去を行なう方式を用いた(三宅・山本, 1976)。

Table 1
分析対象者†

	過疎	都市
30 歳代	140 (140)	198 (242)
40 歳代	196 (221)	198 (241)
50・60 歳代	38 (38)	73 (73)

† カッコ内は、調査対象となった世帯主の総数。

的係わり（子どもの発育上の問題、子どものしつけ、子どもの日常生活、学業成績・勉学意欲）、第5因子・健康問題を中核とした自己存在（自分自身への不満、家族の健康）。

以上のように、地域生活については2因子 10 尺度、職業生活については1因子 5 尺度、家族生活については5因子 16 尺度が得られた。

分 析 II

目 的

分析Iで得られた各因子について、対象者ごとの因子項目得点（因子構成下位尺度の粗点の合計）を算出し、クラスター分析を適用し、特徴的なストレスパタンを示す核プロフィールを確定することを目的とする。

方 法

分析対象者 分析Iで対象となった者のうち、30 歳以上の世帯主に限定した。また、200 名を越える群については、職業別総数の比例配分によって、それ以下の数に減じた（Table 1）。

結 果

クラスター分析 Table 1 に示した各群ごとに、単純距離を用いたQモードクラスター分析を行なった。そして弁別効率曲線を描き、それらの群に共通してクラスター数の著しい減少を示す切断距離として、暫定的に15という値を決定した。

得られた樹状図に基づき、切断距離15以下のものから、さらに核プロフィール（Tryon & Bailey, 1970）を決定するために、次の2つの基準を設定した。（a）1つの核プロフィールは7名以上の事例を含むこと。（b）その核プロフィールの密度指数（Id; Index of density）が.300以上であること。ただし、

$$Id = 1 - \frac{\left[\frac{\text{最大値を除く各プロフィールの距離の和}}{\text{プロフィール数} - 1} \right]}{\left[\text{設定された切断距離} \right]}$$

なお、Id は最大値1（すべてが完全に同一プロフィールの場合）から最小値0（すべてのプロフィール間の距離が切断距離に等しい場合）までの値をとる。

以上の手続きを経て選ばれた核プロフィールについて、Id の大きい順にまとめて示すとともに（Table 2）、紙数の都合上、分析Ⅳの代表事例が抽出された核プロフ

Table 2
核プロフィール一覧

年齢	過疎			都市		
	核プロフィール名	事例数	Id	核プロフィール名	事例数	Id
30 歳代	K 31	7	.593	T 31	16	.582
	K 32	36	.562	T 32	53	.506
	K 33	9	.492	T 33	7	.464
	K 34	21	.377	T 34	22	.445
	K 35	7	.332	T 35	18	.398
	K 36	12	.323	T 36	7	.305
40 歳代	K 41	10	.500	T 41	17	.692
	K 42	27	.494	T 42	50	.487
	K 43	10	.443	T 43	31	.425
	K 44	20	.433	T 44	9	.312
	K 45	8	.346	T 45	7	.302
	K 46	8	.340			
	K 47	11	.323			
	K 48	16	.301			
50・60 歳代	K 51	9	.351	T 51	24	.523
				T 52	7	.400

イルについてのみ、各因子ごとの因子項目得点の平均と標準偏差を示した（Table 3）。

これらの結果は、居住地域別、年齢段階別の、いわゆる羅列的なデータであって、それらの核プロフィール間の相互関係や、各々の核プロフィールが代表しているストレスの特徴などは、未だこの段階では明らかでない。ここからさらに、核プロフィールの相互関係に基づいて少数の類型的なものに集約していくとともに、それらが実際にあらわしている構造的な意味について検討していくことが必要である。

分 析 III

目 的

分析Ⅱで得られた核プロフィールについて、各年齢段階内、年齢段階間、および過疎都市間の相互の関連を明らかにすることが目的となる。

方 法

各核プロフィールの因子項目得点の平均値を代表値として、すべての核プロフィール間の対応関係を、林の数量化Ⅲ類によって分析する³。

³ 数量化Ⅲ類に先だって、Qモード因子分析を行なったが、第1因子で全分散の89.77%が説明されることになり、それ以上の因子抽出は不適当と判断され、数量化Ⅲ類を手掛りとして用いることにした。

Table 3
核プロフィールの因子項目得点平均および SD†

領域 因子 核プロフィール		地 域 職 業				家 族			
		1 制度的 ストレス	2 非制度的 ストレス	1 職 業 生 活	1 家族成員 相互関係	2 家族 経済生活	3 居 住 環 境	4 子 ども との関係	5 健康・ 自 己
過 疎	K42	8.04 (6.24)	2.59 (4.74)	5.15 (5.59)	1.56 (2.56)	4.74 (4.04)	3.52 (4.22)	2.63 (3.00)	1.56 (2.34)
	K43	23.40 (3.03)	3.00 (2.16)	3.90 (2.42)	1.80 (2.15)	3.70 (3.74)	4.80 (4.94)	1.80 (2.25)	2.30 (2.79)
	K44	21.80 (4.72)	13.20 (2.48)	14.15 (5.41)	2.05 (2.50)	5.95 (2.82)	3.95 (2.82)	3.65 (3.72)	4.45 (2.42)
	K45	16.13 (5.14)	8.88 (6.33)	24.63 (4.81)	4.25 (2.61)	5.25 (2.92)	1.75 (0.89)	5.00 (2.78)	4.00 (2.39)
	K46	29.13 (5.14)	11.63 (4.98)	2.75 (2.12)	2.50 (2.93)	5.13 (2.75)	16.13 (2.64)	6.38 (2.97)	2.63 (3.20)
	K47	39.91 (3.81)	17.00 (3.13)	19.00 (3.19)	7.27 (4.36)	9.09 (2.81)	6.55 (3.08)	11.64 (5.10)	4.91 (3.65)
	K48	25.94 (4.95)	10.88 (4.24)	14.38 (3.56)	4.81 (2.95)	12.13 (2.96)	9.94 (3.44)	10.81 (4.25)	8.00 (3.92)
都 市	T33	29.00 (2.51)	9.00 (3.74)	16.43 (1.40)	2.71 (2.12)	10.29 (3.06)	4.14 (1.46)	5.71 (3.95)	3.57 (1.40)
	T34	27.32 (3.61)	12.68 (4.27)	7.41 (3.51)	3.05 (3.13)	4.77 (4.09)	4.05 (3.72)	1.23 (2.07)	2.68 (2.87)
	T35	15.83 (4.96)	8.44 (3.70)	19.33 (3.13)	2.28 (2.21)	6.89 (2.62)	5.61 (4.73)	3.06 (2.76)	2.72 (3.28)
	T41	2.47 (2.06)	1.06 (1.66)	1.41 (1.94)	0.29 (0.96)	1.59 (1.46)	0.71 (1.64)	2.24 (2.26)	0.77 (1.55)
	T42	13.06 (4.18)	6.80 (6.98)	7.74 (4.44)	3.56 (3.87)	4.86 (2.98)	2.76 (3.17)	2.78 (2.69)	1.78 (1.89)
	T43	26.81 (3.84)	10.58 (4.69)	8.13 (4.05)	2.55 (2.63)	7.36 (3.62)	4.03 (3.22)	4.10 (3.04)	3.39 (2.64)
世帯主 全 数 (n=864)		19.46 (10.85)	9.13 (7.02)	12.13 (9.22)	4.99 (6.06)	7.27 (5.09)	6.19 (5.61)	5.95 (5.88)	4.09 (3.86)

† 分析Ⅳで代表事例が抽出された核プロフィールのみに限定した。

結 果

数量化Ⅲ類 この方法は、定性的な反応パターンに基づいて、カテゴリーや事例を分類するための基本的な軸を算出するために用いられる。ここでは、すべての世帯主（20歳代の者を含む）864名についての各因子項目得点の平均値（Table 3, 下欄）を切断点とし、その得点に等しいかそれより高い値を1、それより低い値を0として、各核プロフィールの得点を換算した上で適用した。

結果は、第1次元の固有値は大きい（.522）、第2次元（.170）、第3次元（.094）はかなり低くなっている。ここでは、核プロフィールをいくつかの群に分類しうるかどうかという観点から、各次元を対にしてその座標軸上に各核プロフィールを位置づけたところ、第1および第3次元によってプロットされた場合が、群のまとまりがもっとも明確であった。第1次元は、全体としてのストレスの高低を示す軸であり、第3次元は人間関係中心のス

Fig. 1. 数量化Ⅲ類による核プロフィール間相互関連。

トレスと経済生活のストレスを対極とする軸である。この2軸に基づいて、Fig.1に示したように、28個の核プロフィールを、大きく6個の群にまとめた。

分 析 IV

目 的

分析ⅡおよびⅢを通して得られた群がどのようなストレス状況にあるか、また、過疎と都市との間でストレスパタンの構造にどのような違いがあるか、こうした内容的な検討を代表事例の分析を通して行ない、はじめに述べた本研究の主目的、すなわち方法的な吟味と、あわせて過疎と都市間の社会的ストレス状況の構造的な差異についての比較検討を行なうことが目的となる。

方 法

代表的事例研究による分析をすすめるために、次のような手順がとられた。(a) デモグラフィックな要因について、各核プロフィールおよび各群ごとの最頻反応を決定する。(b) 最頻反応が過疎と都市で非常に異なり、しかもそれぞれ過疎または都市の核プロフィール間で共通性が高い場合、同じストレスパタンではあるが、過疎型と都市型の2類型に分ける。(c) 各類型の中で、デモグラフィックな要因の最頻反応にもっともよく対応する核プロフィールを決定する。(d) 選ばれた核プロフィールに含まれる事例について、そのデモグラフィック要因の最頻反応に一致する事例を代表事例とする。(e) 複数事例が選びだされた場合、各尺度項目に対する反応のうち最頻のものを、その代表事例の反応とみなして解釈する。(f) デモグラフィックな要因、社会的ストレス尺度のすべての項目に対する反応、および生活意識等の質問に対する反応のすべての資料に基づいて事例の記述を行ない、それぞれの類型のストレス状況を構造的に明らかにすると共に、類型間および過疎と都市間の構造的な特徴についての比較検討を行なう。

結 果

核プロフィールのみから得られた6群について、上記の手順で分析を進めた結果、以下に示すような9類型が得られた。過疎の類型が5、都市の類型が3、共通の類型が1である。以下に、各類型について、代表事例の分析を通して、その社会的ストレス状況の構造的な特徴について述べていく。

1. 第Ⅰ群・過疎低ストレス型(4事例; K32, K42†, K51)† 40歳代の自営業者で、生後ずっと山村地域で生活しており、現在1戸建の持家に3世代で住んでいる。自家営業について、経営の見通しに不安があり、保障制

度が十分でないので安心できないといった、職業生活上の若干のストレスは存在するが、全体的に生活は安定している。他には、公共施設の不備に対する不満や、老後・不時の際の蓄えを考えると心配になることが見られる程度であり、それらのことを含めてとくに悩んだり苦しんだりはしていない。将来の生活についても全般的に明るい見通しを持っている。経営規模の大きい富裕な農家が想像される。

2. 第Ⅰ群・都市低ストレス型(12事例; T31, T32, T41†, T42†, T51) 40歳代の会社員であり、3年から10年、住宅地域の1戸建の持家に住んでいる。夫婦と子どもの核家族で、生活全般にわたってストレスは低い。交通の不便さ、職場での仕事上の気苦労、老後や不時の蓄えなどに不満や心配が見られる程度である。生活意識や生活感情の項目においては、ほぼ一致して、困ったり悩んだり苦しんだりすることはないとしており、現在の生活に満足し、将来の見通しもまあまあだとしている。安定した企業に勤める勤労者層であり、一定の地位を得ている層のように思われる。

3. 第Ⅱ群・過疎制度的ストレス高型(1事例; K31, K35, K41, K43†) 40歳代で、生後ずっと山村地域に住んでいる。1戸建の持家に3世代で住んでいる。職業は会社員である。生活環境としては恵まれず、消費生活、通勤条件、住環境、家屋構造など、多くの生活領域で不便、不自由を感じており、とくに医療体制や防犯・防災対策、教育環境などの行政的な不備に強いストレスを感じている。さらに、家族の健康上の障害もあり、家計の圧迫感も強く、その日その日を暮しているといった生活基盤の不安定さを感じさせる。会社員という職業と山村という生活の場の不適合性が、解決の見通しの立ちにくいストレスを生みだしている。ただし、職業生活そのものについてのストレスはあまり見られず、生きがいや将来の見通しについて、どちらかといえば肯定的であることが救いになっている。兼業農家と思われる。

4. 第Ⅱ群・都市制度的ストレス高型(6事例; T34†, T52) 30歳代の会社員で、3ないし10年、住宅地の1戸建持家に住んでいる。核家族で、地域の生活に十分なじめず、近所づきあいも深まらず、そこでの生活が未だ根づいていない感じがある。住宅地域ではあるが未だ整備不十分で、交通、医療体制、防犯・防災、教育などの公的機関の対策やサービスに強い不満をもっている。しかし、生活感情は全般的に明るく、現状に一応満足できるし、将来の見通しもまあまあだと考えている。若い働き盛りの勤労者層を代表する類型と思われる。

5. 第Ⅲ群・過疎高ストレス型(7事例; K33, K36, K47†, K48†) 40歳代で、生後ずっと山村で生活し、1戸建の持家に3世代で住んでいる。職業は会社員で、生活のあらゆる面でストレスが高い。社会生活面では、日常

† 各類型について、カッコ内左端は分析の対象となった代表事例の数であり、右側は該当核プロフィールである。なお、†印は、代表事例が抽出された核プロフィールを示す。

の消費生活、地域社会での役割、公共事業、行政サービス、防犯・防災対策、交通、医療体制等に不満をもち、職業生活についても、工場設備が不備であり、人間関係にも気苦労が多く、通勤条件もよくない。家族生活では生活資金のやりくりや、子どもの生活態度の問題で頭が痛く、生活にゆとりが持てない。将来の見通しに暗さを感じている。日雇い勤務的な労働に従事し、生活の場を離れられないために不満ながら働いているようである。このストレスパターンは過疎地のみにみられるものであり、“過疎職業ストレス高群”と比較しても、はるかに克服困難なストレス状況に置かれており、いわゆる流出の可能性の高い特徴を示しているともみてよいであろう。

6. 第Ⅳ群・教育・文化ストレス高型(6事例; K34, T36, T43[†], T45) 40歳代の会社員であり、3ないし10年、都市の新興住宅地の1戸建持家に住んでいる。核家族であり、交通や医療体制の不備、防犯・防災対策についての不満という一般的なストレスに加えて、文化的な施設の不満を訴え、子どもの進学問題についてのストレスを述べている。ここに含まれている過疎のプロフィールは、居住地は過疎ながらも住宅地域や商業地域に居住し、職業も自営業、会社員、公務員を等しい比率で含んでおり、また長子が中学または高校に在学しているなど、デモグラフィックな要因そのものにも都市的要素が含まれている。代表事例をみると、一応安定した企業に勤務し、一定の地位を得ており、家族関係にも安定した望ましい様子がうかがえ、子どもの教育や自己の文化的水準の維持に熱意をもつ人たちと考えることができる。都市中産階級型といえそうであり、それが都市だけでなく、過疎地にも見られることが注目される。

7. 第Ⅴ群・過疎職業ストレス高型(4事例; K44[†], K45[†]) 40歳代の自営業で、生後ずっと山村地域に生活し、現在も1戸建の持家に3世代で住んでいる。自営の家業について、労働時間が不規則で休みがとれず、収入が少なく不安定、保障制度もなく、経営の見通しもよくないなど、多くの項目でストレスが示されている。生活の基盤としての農業にそれなりに依存はしているが、それだけでは安定した生活のできないiraだちが示されてきていると見てよいであろう。また、社会生活面では交通の不便さ、医療体制の不備、行政サービスの悪さなどがストレスとなっている。日々の生活は一応安定しているようではあるが、感情的にはあまり好ましい状況とは見ておらず、職業のストレスの高さとも対応して、将来の見通しについての判断が暗い方に傾いている。従来、過疎地域の農業を支えてきた中規模経営の農業者層を代表するものと思われる。この類型は、今後とくに過疎地域の農業再編成の動きの中で、土地利用の社会化の問題ともからみながら、もっとも直接的なストレスを経験させられることになる。

8. 第Ⅴ群・都市職業ストレス高型(7事例; T33[†], T35[†], T44) 30歳代の会社員で、3ないし10年、住宅地域の1戸建持家に住んでいる。核家族である。労働時間は不規則で、悪条件下で身体的な危険を伴う肉体労働に従事し、収入も不安定で少ない。また、職場での上司との関係に気をつかうなど、職業生活上のストレスが著しく強い。交通、医療体制、防犯、教育など公的サービスに対する不満もある。収入の少なさに加えて、借金の返済が負担であり、老後の生活資金にも不安を感じており、将来の見通しにも暗さを感じている。生活のために、若さにまかせて一所懸命働いている、下請け的な作業所に勤務する工具層であろう。

9. 第Ⅵ群・過疎居住環境ストレス高型(1事例; K46[†]) 40歳代の公務員であり、3ないし10年、1戸建の借家に、夫婦と子どもで住んでいる。住み心地は悪く、その地域の生活感覚になじめない。職業に関しても、自分の能力を発揮できない、上司は自分の能力を認めてくれない、などの不満をもち、人間関係についての気苦労も多い。家庭でも、子どもの生活態度に不満があり、家族間でのいざこざも多い。全体として、現在の生活に直接不満をぶっつけていくほどの激しさはないが、将来についての不安感、見通しの暗さなどを、漠然とはあるが感じている。過疎地の公務員宿舎に借家住いをし、過疎地に赴任していること自体に不満で、転出を絶えず念じてはいるがその見通しの明らかなでない、過疎地仮住いの人たちと見るができる。

考 察

本研究の主目的の1つは、過疎と都市とのストレスパターンの違いを明らかにすること、とくに過疎地域の居住者が、都市居住者と比較してどのような問題をかかえており、どのような危機的状況に置かれているかを構造的に明らかにすることであった。そして、すでに述べたように、われわれは分析のステップを踏みながら、最終的には各類型のストレスパターンの特徴とあわせて、尺度を構成する個々の下位項目に対する反応にまでもとって、各類型の代表事例の記述を行ない、またその類型の基本的特性についての考察も加えてきた。

結果として、都市の場合には、個々の類型の特徴については、すでにみてきたように比較的単純な構造が示されたのであるが、類型間の関連についても低ストレス型から教育・文化ストレス高型、制度的ストレス高型、そして職業ストレス高型へという、比較的明確なストレスパターンの階層構造のようなものが示されていると考えられる。一方、過疎地域においては、低ストレス型、制度的ストレス高型、職業ストレス高型、高ストレス型の4類型が一応の階層構造をなしているように思われるが、さらに、教育・文化ストレス高型のような都市型のスト

レスパタンを示すものがあったり、居住環境ストレス高型のような、過疎地域へ入りこめないままに不適応構造を示すパタンも存在することが明らかとなった。以上のような結果は、都市との比較において、過疎地域のストレスパタンが、都市化の進行とかかわりながら、構造的により多様化、複雑化しつつあることを示すものであろう。また、この結果は、本論で試みられた分析のステップが、意図した方向で十分に有効であったことを意味するものでもあろう。

視点をえて、過疎地域等でのストレスパタンをとらえていく上で方法論的な問題について、データ収集の段階からデータ集約の段階まで、いくつかを検討しておきたい。第1は、調査内容について、デモグラフィックな要因についての項目が不十分であったことと無記名であったことが重なって、事例研究を意図しながら、個々の事例についての情報が不足し、より深い分析ができなかったことが問題となろう。第2は、対象となった地域が、過疎も都市も愛知県に限定されていたことである。われわれが現地調査した山形県や島根県などと比較して、愛知県の過疎地域の場合、現金収入の手段が得られやすく、過疎地域の厳しさ一般が、類型の中に十分に反映していないおそれがある。“教育・文化ストレス高群”に過疎の核プロフィールが含まれているのも、あるいはそうしたことの影響かもしれない。第3は、調査時期の社会経済的背景の問題である。すでにUターン現象がかなり一般化して見られるようになり、愛知県などで定住化傾向の強まりが指摘されるようになってきていることを考えると、過疎の持つ意味そのものが変質しつつあることは明らかである。われわれの得た過疎のストレスパタンは、そのような背景を持ったものとして位置づけられ、過去のデータや今後の変化等との比較検討がなされていくことが必要であろう。

データを集約していく過程で、第4に、クラスター化の最適基準についての問題がある。本論では弁別効率曲線に基づいて視察によって基準を決定し、さらに核プロフィールを決定するうえで、二次的なクラスター化とでもいうべき密度指数を用いたのであるが、このような手順の有効性についてさらに検討する必要がある。第5は、核プロフィール間の相互関連の分析の問題である。本来であれば、すべての事例を一度にクラスター分析にけることによって解決できるはずであるが、ここでは2段階のステップを踏まざるを得なかった。そして、各核プロフィールの代表値が、まるめられた平均値であることもあって、十分に相互の関連を分離しきれなかった感がある。核プロフィールの代表事例を先に決定し、そのプロフィールに基づいて相互関係を分析することも試みられてよからう。第6は、代表事例の決定の手続きの問題である。デモグラフィックな要因に基づいて、各核プロフィールの

最頻反応を示したものを代表事例としたのであるが、方法論上の流れからすれば、各核プロフィールの密度の最も濃い部分に注目して事例を抽出するなど、他の方法の可能性についても検討することが必要であろう。

引用文献

- Dohrenwend, B. S., & Dohrenwend, B. P. (Eds.) 1974 *Stressful life events; their nature and effects*. New York: John Wiley & Sons.
- 小林晋・石原邦雄・坂本弘 1977 地域環境の変化と住民の健康度(1) 精神衛生研究, 第24号, 1-48.
- Levine, S., & Scotch, N. A. 1970 *Social stress*. Chicago: Aldine.
- 松田惺・久世敏雄ほか過疎研究グループ 1973 いわゆる過疎地域の家族関係(10) —子どもに対する役割期待について(その2) 長野県上村と熊本県水上村の比較検討および全体的考察—名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科一, 第20巻, 17-38.
- 三宅一郎・山本嘉一郎 1976 SPSS 統計パッケージ I 基礎編 東洋経済新報社.
- 三宅一郎・中野嘉弘・水野欽司・山本嘉一郎 1977 SPSS 統計パッケージ II 解析編 東洋経済新報社.
- Selye, H. 1976 *The stress of life*. (Revised ed.) New York: McGraw-Hill.
- Shontz, F. C. 1965 *Research methods in personality*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 鈴木眞雄・続有恒ほか過疎研究グループ 1972 いわゆる過疎地域の家族関係(7) —家族内の将来の見通しについて— 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科一, 第19巻, 95-103.
- Tryon, R. C., & Bailey, D. E. 1970 *Cluster analysis*. New York: McGraw-Hill.
- 植村勝彦 1974 いわゆる過疎地域の家族関係(11) —地域共同体意識の変容(2): 私的共同活動の場合— 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科一, 第21巻, 41-55.
- 植村勝彦・松田惺 1974 いわゆる過疎地域居住者とその地域からの離村者の比較検討 年報社会心理学, 15, 193-211.
- 植村勝彦・永田忠夫・松田惺・鈴木眞雄 1979 a 社会的ストレス尺度の構成 社会福祉学部研究報告(愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所社会福祉学部), 第4号, 1-21.
- 植村勝彦・松田惺・永田忠夫・鈴木眞雄 1979 b 家庭生活における社会的ストレスの構造 年報社会心理学, 20, 201-218.
- 植村勝彦・鈴木眞雄・永田忠夫・松田惺 1979 c 地域生活における社会的ストレスの構造 地域福祉研究(日本生命済生会社会事業局), 7, 13-22.
- 山本和郎 1973 地域精神衛生からとらえた環境—その影響に関する研究の問題点— 心理学評論, 16, 277-297.

—1980. 7. 26. 受稿, 1981. 1. 24. 受理—